

IGU Moscow 2015 参加報告

広域システム科学系 博士課程1年 加藤秋人

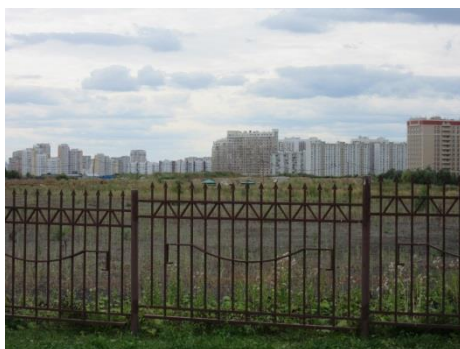
モスクワ大学にて8月17～21日の日程で行われた標記の国際学会に参加し、口頭発表を行った。IGU（国際地理学連合）は1922年に正式発足した世界の地理学分野全体を総合する学会である。現在は、今回参加したような国際会議が1～2年に一度開催されている。ちなみに2013年には京都で開催された。

さて、本学会での口頭発表が、私にとって初めての国際学会での発表であった。英語力が無い私としては、発表そのものは原稿に頼ればよいとて、質問に対応できるか否か、とりわけ相手の質問を聞き取れるかが問題であった。そうした不安を抱えつつ、大会3日目・19日に、京都の中小企業ネットワークによる試作品生産の取組みに関する発表をした。結論から言えば、前述の不安は杞憂であった。英語力の無さから原稿をゆっくりとしか読めず、それゆえ質問者が気を遣ってくれた部分もあろうが、問題なく質問を聞き取れた。それに対する私の回答も、自分で分かるくらい文法は滅茶苦茶だったし、もっと良い答えはできたし、さらに言えば質問者も十分納得したわけではなかったが、ただその場で思いつく限りの答えを相手に伝えることはできた（はずである）。

地理学、少なくとも経済地理学においては、論文を読む限り日本と海外で研究のアプローチあるいはスタンスが異なる部分は少なくない。今回受けた質問は、統計データなどを重んじる外国人らしい質問であり、改めて日本と海外の研究のあり方の違いを肌で感じ、また海外の研究者が自分の研究を見るとどう映るのかを知ることができた。そして何よりも、現状の英語力でも最低限はなんとかなるのだ、という自信を得ることができた。無論、もっと英語のスキルを磨かなければ、あるいは磨いてよりスムーズな議論をしたいという危機感や願望の方が強いのだが。



モスクワ大学（スターリン様式）



林立する郊外の高層マンション群



地下鉄は約2分毎に来るが常に混雑

最後に、地理学ということで、今回訪問したモスクワに触れたい。モスクワは欧州最大の人口を有し、また社会主義時代の建築物も多数残る都市である。スターリン様式の巨大建造物、林立する高層マンション、発達した地下鉄網等、日本ともまた他の欧米の都市とも異なる特徴を有する都市の景観を体験できたことは、今後地理学を教える立場を目指すものとして貴重な体験であった。